

今月の 人材開発キーワード

New Keywords

【対話】	【組織学習】	【孤独】
【暗黙知】	【能力モデル】	【意思決定】
【振り返り】	【モチベーション】	【リベラル・アーツ】
【メンターシップ】	【組織バリュー】	【絆(関係性)】
【習慣】	【人事診断】	【プロフェッショナル】
【過剰学習】	【目標】	【アンカー】
【コミュニティ】	【創発】	【雇用デフレ】
【コミットメント】	【労働力】	【犠牲】
【コンピテンシー】	【忘却】	

—【犠牲】—

ソフィアコンサルティング株式会社 田添忠彦

戦前から戦後にかけての長い期間アメリカFRB（連邦準備制度理事会）議長を務めたマリナー・エクルズは、恐慌状態（≒デフレ）に臨む政府の姿勢について、次のような認識を持っていたという。

敵国との戦争から人命を守るために使われるのと同じ政府債務が、平時においては、失意と絶望から人命を守るためにも使われるのである。戦争を戦うための政府の能力には制限がないと同様に、恐慌と戦う政府の能力にも制限はない。両方とも、人的資源と物質的資源、頭脳そして勇気のみにかかっている。（中野剛志著『レジーム・チェンジ』、NHK出版新書刊から引用）

今日の日本政府は、主要国で唯一デフレ状況にありながら、財政出動を増やすどころか消費増税を行うという、エクルズとは正反対の政策を行っている。また、その唯一の反対勢力である「小沢グループ」（主要メンバーは民主党を離党）も、「消費増税反対」は唱えるものの、消費増税を行ってはいらない事情を正確に認識している政治家集団には見えない。現に、グループは離党に当たり2つに割れたが、その主な理由は、議

員それぞれの選挙区事情によると見られている。要するに、大半のメンバーの行動原理には、国を救うための“犠牲”の気配はない。

国が戦争と同様の危機的状況に直面しているときに、国家権力の中枢もしくはそれに近い人々が自らを犠牲にせずして、一体誰が犠牲になるというのだろうか。

■自己だけに収斂する価値観

最近、一部芸能人が関係した不正受給に絡んで、生活保護制度の腐敗が取りざたされている。

デフレ経済の下、生活保護受給者は近年飛躍的に増加し、受給者数にして200万人を超え、年間支給総額は4兆円に迫る規模に膨らんでいるという。そこには、大きく3つの問題が見える。

- ①適正なチェックは不可能なのではないか
- ②そもそも制度自体がおかしいのではないか（受給金額が大きすぎる）
- ③一体不正受給はどれだけあるのか（仮に3割でも毎年1兆円の損害）

受給者数が200万人にも達している状況では、そもそも市役所等に不正チェックの適正な実行を期待するのは難しい。数が多すぎ、

またチェックすべき事項（家族の援助の可否、本人の就労可能性等）も多岐にわたるためだ。それを、税務署のように警察権限を持たない自治体が行うのは困難を極める。

つまり、生活保護制度の現実としては、制度の適正運用のいかんは、「国民自身の善意」に任されている。言い換えれば、悪意の不正受給は防げない状況にある。

そうすると、現実には制度を必要としている多くの国民が存在することを前提にすれば、制度の存続は、国民の矜持と価値観にかかってくる。身近な親族（親、兄弟、子供等）が何らかの事情で生活の困窮に直面している際、当然のこととして援助の手を差し伸べるのか。そもそもそのようなことにならないような支援関係を日頃から維持しているのか。仮にやむをえずいったん生活保護を受給することになっても、その原資が他の国民の血税で賄われていることを意識して、生活自立の努力を懸命に行うのか。また、その状況を当局にきちんと情報共有していくのか。

これに対して、不正受給に関係している人々には、自己の利益しか見えていない。生活保護を受給する一方で就労して給与を得る、マンションを購入する。医療費を

たぞえただひこ ソフィアコンサルティング株式会社 代表取締役社長。
立命館大学文学部卒。大手電子部品メーカー人事部、国内コンサルティングファーム2社の取締役、パートナーを経て現職。
上場・中堅企業を対象とした組織人事体制改革、人材マネジメント、人材育成戦略、評価・報酬運用に関するコンサルティング実績多数。診断・戦略立案・政策提言から制度定着・運用、教育研修、組織・業務改革まで一貫したサポートが特徴。
<http://www.philosophia.co.jp> inquiry@philosophia.co.jp

不正に申請する。医療機関で多量の薬の処方を受けて転売する……といった数々の不正が横行している。しかも、それらは上に見た役所の調査能力の制約からほんの氷山の一角といわれている。

■他者を利する価値観

かつて日本人は、自らを犠牲とするに足る、かけがえのない価値を意識していた。

百田尚樹作の時代小説『影法師』（講談社文庫刊）には、江戸期に生きた彦四郎という名もない高潔な武士の生き様が描かれている。彼は、剣術においては最高の剣士であり、学問と実務においては藩のエリートだった。にもかかわらず、自分が見込んだ生涯の友（主人公・勘一）の出世と幸せのために、自らの人生すべてを犠牲にする。具体的には、相思相愛だった女性を、勘一の求めに応じて嫁がせてしまう。さらには、藩から命じられた上意討ち（藩命による暗殺）の決闘を、秘術を使ってわざとしくじり勘一に手柄を持たせて出世への足がかりを作る。それによって「卑怯者」のレッテルを背負い、命にも代えがたい武士としての誇りまでもかなぐり捨てたのだった。

つまり、友の「影法師」として一生を捧げたのだ。それが、ひとり友のためのみならず、国のため民衆のためと考えたからだ。

こうしてみると、一見ネガティブに見える「犠牲」とは、決して最大多数の最大幸福のために一部個人が自己の利益や幸福の追求を断念するというような功利的で後ろ向きの出来事ではない。それは、他者の中に自らの命さえも越えるより高い価値を見出すことだ。そこには、その人と自分が友情や愛情で固く結ばれていることへの揺ぎない誇りも意識されている。

このような物語は決して稀有なヒーロー譚ではない。その背景には、いうまでもなく無数の史実がある。

■命を越える価値

靖国神社の社頭前掲示板に長年掲載された先の大戦戦没者の遺書を集めた『国民の遺書』（小林よしのり編、産経新聞出版刊）には、神風特攻隊の戦死者ばかりでなく、中国戦線や南太平洋の島々の戦場での戦死者、さらには戦後不当な「裁判」によってアジア各地で連合国によって処刑された（「法務死」という）旧日本軍兵士の若者たちの最期の言葉の数々が掲載されている。

どれも涙なくしては決して読めない真実の言葉だが、紙面の関係であえて一つだけ引用しておきたい。

大東亜戦争で散った若い将兵が、決して自分の家族や恋人を守

りたいだけでなく、ましてや一時の若気の至りで特攻隊に志願したのでもなく、日本国を、そしてその将来の国民の名誉までも考えていたという事実。ひとりの特攻隊員の最期の言葉に、そのことを見て取ることができる。

学鷲は一応インテリです。

さう簡単に勝てるなどとは思っていません。

しかし、負けたとしても、そのあとはどうなるのです……………

おわかりでせう。

われわれの生命は講和の条件にも、その後の日本人の運命にもつながってゐますよ。

さう、民族の誇りに……………

海軍少佐の西田高光氏は特攻に出撃する直前、当時海軍報道班員だった山岡荘八氏（後の大作小説『徳川家康』の作者）のインタビューに対してこう答えた。

弱冠22歳、師範学校の学生で、おそらくは特攻隊に志願してからわずかの時間しか経過していなかったはず。にもかかわらず、いったん国の危機を打開するため一命を捨てることを決意した澄み切った精神には、民族の歴史の重みとその行く末がはっきりと見通されていた。

こうした戦士たちのかけがえのない犠牲の礎の上に、現代の日本がある。これは、紛れもない事実というほかはない。